

中には其外に作りかけの腰掛けた女や立つた女の種々な像が美しい曲線の律音を漂はしてゐる、吳君は九大内科で稻田博士の後を承けて主任教授になつた吳博士の實弟だ、『製作してゐる時は暑い事も忘れてゐます、此別科では私共の外に清水彦太郎、荻島、松平榮之助、長谷川勝之、吉川保正の諸君が午前中製作してゐて午後から朝倉先生の工房でやつてゐます』と又相川君は『暑い時は百〇二度にもなりますが懸命にやつてゐるので却て放課後の方が苦しい位です』と、今年是一般に若い作家の製作が非常に多くモデルも間に合ひ兼てる程である、それから一大壯觀を呈してゐるのは研究室で寫眞の通り堀江尙志、久保田吉太郎、松田尙之、安藤照、泉谷喜一郎、小室達の諸秀才が何れも六尺に餘る裸婦を製作してゐるのである、此所は淺倉教授が衣物も袴も汗に濡れる程熱心な監督をしてゐる丈あつてモデルも肉體の匂やかな粒揃ひで従つて作も傑出してゐる。

#### ⑩ 曠原社

大正八年に朝倉文夫以下本校彫刻科卒業生たちが東台彫塑会を結成したことは第二卷(799〜801頁)に記したが、同十年十二月にはそれに反発する建昌大夢、北村西望その他が曠原社を結成した。彫刻科三教授のうち一人が東台彫塑会を、他の二人が曠原社を率いるかたちとなつたことは生徒間に波紋を呼び起こし、また、帝展審査において両派の軋轢が露骨に現れたりしたが、両派の対立は芸術上の主義主張の相違から生じたものではなく、組織の在り方に関する意見の相異から起こつたもので、どちらかと言えば勢力争いに近いも

のであった。

この曠原社については、当事者の北村西望が次のように記してゐる。

#### 曠原社旗揚げ

建昌大夢君と私が帝展審査員にたった大正八年の十一月である。

朝倉文夫君が、東京美術学校出身の新進彫刻家を集めて、「東台彫塑会」という団体を結成した。評議員が、朝倉君以下、藤川勇造、小倉右一郎、石川確治、吉田三郎、内藤伸の六人、会員が、日名子実三、関野聖雲ら十八人、会友が木内克ら五人で、参加者総勢三百五十人、実に大きな組織である。

この団体が、毎年展覧会を行い、私も建昌君も、これに参加することをすすめられた。しかし、どうも、この団体の在り方が納得いかず、入らなかつた。

この団体の中には、洋行帰りもいて、相当に勉強しているのがかなりそろつてゐる。しかし、帝展に出してゐない者も入つていて、そういうところが、なんとも承服し難い。特に帝展で活動している朝倉君が、帝展に背を向けてゐる者たちまで仲間にして展覧会を開くのは、帝展の分派行動のように感じられて、「ああいうのは良くないね」と、建昌君と語り合つたものだ。

大正十年、私が美校教授になると、建昌君と相談して、私たちも運動を起こそうと計画を立て、十二月、「曠原社」という研究団体を発足させた。東台彫塑会が、評議員、会員、会友とものも

のしい陣容であるのに対し、この畠原社の方は、先輩後輩と分け隔てせず、また美術学校卒業生か否かも問わず、広く門戸を開く組織とした。

集まってきたのは、八手会の池田勇八、国方林三、学生時代世話になった美校助教授の水谷鉄也先生、建昌君と同窓だった木彫の関野聖雲美校助教授（この人は東台彫塑会にも入っていた）らで、現在活躍の沢田政広君もいた。その数は六十余人。この団体展を毎年開催することにした。

この畠原社旗揚げの際、「畠原」と題するパンフレットを出して、それに宣伝文「われ等の言葉」を載せた。

五条から成る文章で、その一は、「あらゆる芸術は、個性の燃焼から生まれる。人格の光りから生まれる。これは芸術即人格とする人格主義芸術の立場だ。人格主義芸術はわれ等の立場である」とうたっている。

まあ、芸術運動というのは、どういふものでも、旗揚げの時は、そのくらいは言う、といった見方もあろう。だが、今顧みても、意外なほどにはなはだ民主的で、自由主義的で、その盛んな意気込みは、愉快でさえある。

それに、そこで主張している人格主義芸術は、当時私が考えていたことだが、今でも思いを凝らすことでもあり、人の考え方は、月日が長くたって、いっこうに変わらないものだ、つくづく感じる。

畠原社は、ただ展覧会を開くというだけでなく、もっと実践的な方針を立てていて、翌年は、上中里から近い滝野川西ヶ原の高

台に、農園の跡地三百坪（一坪二三・三平方メートル）ばかりを求めて、そこに研究所の建物を建てた。彫刻家はアトリエが必要だが、修業中であつたり貧乏だつたりする者は、アトリエも満足に持てず、先輩や師のアトリエを借りて作るというのが普通だ。そういう不遇な者のために、共同アトリエを作り、そこで鋭意研究していこうというのが、その研究所を建設する趣旨であつた。

研究所の建設が成つたのは大正十一年十二月である。建坪九十坪余。アトリエは五室、会議室付きであつた。十二月二十日には、記念試作展を開き、二千人も招待客を集めて、盛大に祝つた。

ところが、その畠原社も運営一年余で、立ちゆかなくなつた。大正十二年九月一日の関東大震災のせいである。研究所の建物そのものは、震災の被害をそう受けなかつたのだが、畠原社会員の方が、みな何らかの不都合が生じて、だれも現れなくなつて、制作どころでなく、解散せざるを得なくなつたのである。

だが、畠原社は、社団法人にして、法人そのものは、十年ぐらい存続したと思う。

だいたい、東台彫塑会の向うを張って、理想を高く掲げて進み始めたのに、そんな仕儀となり、残念とは思ふが、当時の彫刻界に、それなりに刺激にはなつたろう。

一方、東台彫塑会の方も、そう長くは続いてない。大正十四年で終わっている。

『百歳のかたつむり』前出